平成２１年度 発生予察情報	**特殊報第３号**	平成２２年３月３１日 埼玉県病害虫防除所 (TEL:048-525－0747)

ブロッコリー菌核病による被害の発生について

本病による茎の地際部が軟化腐敗させる症状は以前から発生していました。
しかし、今回、本病によって花梗、花蕾が軟化腐敗する被害が、県内で初めて確認されました。
なお、「ブロッコリー菌核病」の病名は、平成２０年に命名されました。

特殊報：新奇な有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

１　病害虫名　ブロッコリー菌核病（ Sclerotinia rot, Sclerotinia White Mold ）

２　発生経過

（１）平成２１年１２月下旬、県中央部地域の露地栽培ブロッコリーにおいて、花蕾が軟化し腐敗する被害が見られた。被害株を詳細に調査したところ、被害の原因が菌核病菌（*Sclerotinia* 属菌）であることが判明した。

（２）ブロッコリーの産地では、以前から本病による茎の地際部を軟化腐敗する症状が発生していたが、今回は、この症状のほかに、花梗や花蕾が軟化腐敗する被害が確認された。

（３）同様の被害は、鳥取県で確認されており、平成２０年にブロッコリー菌核病として新病害の報告がされている。

３　病原菌の性質及び伝染

この菌に侵された花梗、花蕾は、はじめ暗緑色水浸状でやがて褐色の病徴を示し、湿度が高いと表面に白色、綿毛状の菌糸を生じる。やがて菌糸は集合して黒色の菌核を形成し、この菌核が主に伝染源となる。

また、この菌は多犯性であり、多くの野菜や花き類に菌核病を起こす。アブラナ科野菜では、キャベツ、ハクサイ、ダイコン、カブなどに被害を与える。

４　被　害

秋冬どり栽培では、１１～１２月頃から、茎の地際部、葉柄部などが暗緑色、水浸状となり、病斑部は徐々に症状が伸展する。発病葉柄部の葉はしおれ、白色菌糸が生じる。１２月以降では、花梗や花蕾へと罹病する株が見られ、花蕾の表面に白色、綿毛状の菌そうが発生する。

花梗や葉柄の被害部には、黒色で楕円形から不整形の長さ３～１５㎜の菌核が形成される。

5　防除対策

（１）現在のところ本病害に対する登録薬剤はないので，被害株は菌核形成前にほ場外で処分する。

（２）発病地では連作を避ける。

（３）被害を低減させるため栽培終了後や夏期に栽培ほ場の湛水処理を行う。

花蕾と茎の被害

花蕾の被害

地際部の被害